論説

中国社会文化における〝我〟または／および〝我們〟

――〝自己人〟の概念分析

楊　宜音
（訳＝林　萍萍）

中国人の日常会話では、以下のような表現をよく見聞きする。

内外有別。（ウチとソトを区別する）

胳膊肘不能往外拐。（直訳ではひじを外側に曲げない。喩えとして味方や身内にとって不利なことをしない）

家丑不可外揚。（身内の恥は外に出さない）

大家都不是外人、放心吧！（皆は他人ではないから、安心しなさい）

別見外呀！（水臭いことはよせよ）

一家人不説両家話。（身内どうしでは他人行儀にふるまわなくてよい）

自己哥們的事情、不能袖手旁観。（仲間のことだから、黙って見ているわけにはいかない）

他是咱們的人嗎、要不要防着一点儿？（彼はウチの人なのか？　少し用心しようか？）

……

これらの言葉は社会的相互作用において、物事を認識・処理することが必要である時、中国人は「内」と「外」を用いて、人の群れの中に存在する境界を隠喩する。境界内は「ウチ」で、境界外は「ソト」である。「ウチ」と「ソト」に対して、全く異なる処世術に従っており、その内容は信頼するかどうか、親密かどうか、責任を負う義務があるかどうかといった行動規範に関するものである。〝物以類聚、人以群分〟（類は友を呼ぶ、人は群で分かれる）のように、各文化タイプの中で、「私たち」「彼たち」に分か

れて、「内集団」と「外集団」の概念を形成するのは、疑いの余地がないようである。それでは、〝自己人〟という概念に注目する必要はあるのだろうか？

一　なぜ〝自己人〟を研究するのか

㈠　社会心理学者の文化自覚
――〝自己人〟の研究背景

社会で生活している人々は、「私」「彼」「私たち」「彼たち」の概念と意識を形成する。ある意味で、社会心理学はこれらの概念間の心理距離と心理効果を研究する学問分野である。社会心理学の視点では、個人と個人の関係は「私」―「彼／あなた」の心理関係で、集団と集団、社会カテゴリーと社会カテゴリーの関係は「私たち」―「彼たち」の心理関係で、自分と当集団／当カテゴリーの関係は「私」と「私たち」の心理関係で、「私たち」から見る〝群己関係〟（他者と集団の関係）は、「彼」と「彼たち」の心理関係である（図1参照）。関係とは、ここでは二重の意味がある。一つは接続、接触、交際、関連、コミュニケーション、交流等の双方間の相互作用であり、もう一つは価値志向である。後者は往々にして前者の中に潜んでいる。例えば、自分と集団の関係には、「公」と「私」はどちらが重要なのか、どちらが優先なのかという価値志向を含んでいる。

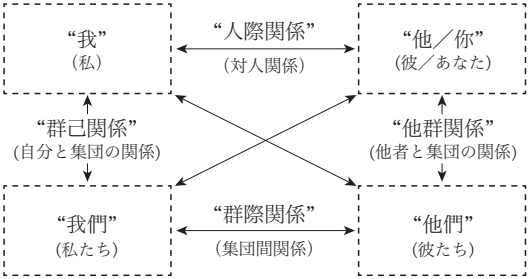

図1　社会心理学が注目している重要な心理的関係

注：「私」と「あなた」、「私たち」と「あなたたち」、「私」と「あなたたち」、「私たち」と「あなた」の中の「あなた／あなたたち」は、関係の相互作用を強調するときに使用する概念である。“咱們”（我々）／“咱倆”（我々二人）は、「私」が「あなた」に対する関係であり、「私たち」が「あなたたち」と一体になったときに使用する概念である。本稿では、「私―私たち」と「私たち―彼たち」の関係に注目し、「あなた」と「あなたたち」の関係はここでは検討しない。

一九八〇年代以降の文化心理学の興起と学際的学問分野にある華人本土心理学者の文化自覚に伴って、中国人の心理をどのように研究・理解するのか、どのような理論と研究方法を用いるのかを考えることは、華人心理学者の注目を集めた一方、北米の社会心理学者の文化研究も促進できた［楊中芳 1991a, 1991b, 1996; 楊国枢 1993; 朱瑞玲 1993; Ho 1991, 1995, 1998; Nisbett 2004; 朱瀅・伍錫洪 2017］。

一九九八年、アメリカ社会心理学分野の権威ある連続刊行物『社会心理学ハンドブック』第四版が発表され、当分野の四人の先駆者が六四ページの長文を書いて、社会心理学と文化との関係を系統的に論述した。氏らは、近年の研究から見ると、基本的な心理過程の多くは、実は文化の意義と文化の実践に依存していることを指摘している。欧米とは異なる他の文化では、心理過程は欧米文化の人々と大きく異なる。例えば、欧米人は、社会的行為が個人の特性に基づいていることを強調するのに対して、他文化の人々は社会の役割、責任と状況といった要素で人々の行為を解釈する。欧米人は、一般的に自分が唯一で、他の人とは異なり、他の人を超えることを強調している。東アジアでは、人々は、自分が普通で、他の人とあまり違いがないことを強調している。この研究の背後にある仮説は、社会生活に参加するには、人々は文化モデル、文化の意義と文化の実践を自分の基本的な心理過程の中に組み込まなければならないということである。これらの心理過程は逆に、文化システムを制限し、再生産し、変更させている［Friske et al. 1998］。

社会心理学の視点から、文化とは何か、文化と社会心理学の相互構築等の重要な課題を理解することにあたって、文化衝突、文化接触、文化間の関係といったグローバル的視点から各文化の自己構築過程と因果関係を検討することはまもなく研究の焦点になった［Chiu and Hong 2006; Wyer, Chiu, and Hong 2010; Nisbett, 2004］。心理学者は、西洋中心の立場を捨て、文化自覚を保持し、すなわち「社会／文化／歴史」の視点から社会成員の思考と行動ロジックを解析する。この点に気づいたため、社会心理学分野は、心理学の「始まり」を切り拓いた七〇年代の「認知革命」［李少崐 1991］と肩を並べる「文化革命」が現れた。

華人社会心理学者が主導する「心理学本土運動」［楊国枢 1993; 朱瑞玲 1993］は、中国内陸、中国香港台湾地区において、多くの本土色を帯びた研究を徐々に始め、〝関係〟(guanxi)、〝人情〟、〝面子〟、〝孝道〟（親孝行）、〝和諧〟（調和）、〝中庸〟といった概念が研究者の視野に入った。中国人学者にとっては、多くの研究の最初の問題意識は、西洋社会心理学理論の解釈力の乏しさから生まれたのである。ある特定の文化で生活している人々が、対人関係、自分と集団、集団間の関係を扱う文化的方式や文化的価値を発展させた場合、それらに応じて、その方式と価値を表す特有な文化概念が生まれることは理解できるだろう［陳原 1980; 楊中芳 1991a, 1991b; 威廉斯 2005］。したがって、これらの文化概念を深く理解することは必須な課題となる。

(二) 西洋社会心理学で解釈できない概念から中国文化心理を理解する

従来の社会心理学の発見は、人間の行為を解釈するため

の普遍的な規則であると考えられており、文化自覚が喚起された時、以下のような論理に沿って分析できる。なぜ、いわゆる普遍的な理論を採用したのに、本土の文化概念を深く十分に解釈することができないのだろうか。

字面から見れば、〝自己人〟に最も近い学術的概念は〝自己〟（自分）または〝自我〟（自己、self）である。社会心理学の歴史をさかのぼると、次のような結論を簡単に出せる。「自己」（self）は常に注目されるテーマであり、William Jamesの「自己」に関する研究から数えると、社会心理学者はこの領域において少なくとも百年以上の学術的な研究を積み重ねてきた。「自己」に関する研究が主流の社会心理学界においては、成果は豊富で、研究者が集まるだけでなく、他の研究テーマにも深く関連している。しかし、主流の社会心理学における「自己」に関する研究は、典型的には「方法論的個人主義」の理論を採用し、個人は集団の中（individual in the group）にあり、その境界が明晰で、独特・唯一の特性を持っている一方、集団は単に個人が生存する外部環境であり、個人の自己独立性を妨害する負の環境である（例えば、Acheの服従実験）と仮定する。〝自己人〟と〝自己〟は一文字違いにもかかわらず、中国の社会文化に浸っている人々は、〝自己人〟は〝自己〟や〝自我〟とは同じでないことがはっきりとわかっている［楊中芳 1991a, 1991b］。冒頭に挙げた日常で使用しているこの概念に関する表現から見ても、〝自己人〟は「自分」一人に限らず、「自分」の枠内の成員になる理由のある人または一部の人、「自分」に属している人を指すことがわかる。彼あるいは彼たちは、「自分」ではないが、自分とは切り離せない、なんらかの密接な関係を持っている。〝自己人〟が「自分」一人ではなく、二人以上の人を指していることから、この概念を理解するには、主流の「自己理論」を簡単に当てはめることはできない。〝自己人〟は自分一人だけではなく、「私たち」、すなわち「内集団」概念のように見える。したがって、〝自己人〟は私たちの中の一分子なのではないかと問い続けてきた。言い換えると、〝自己人〟は「私たち」とは同義概念なのだろうか。

社会心理学者は人の社会集団属性に対する是認を一度も諦めたことはないものの、一九七〇年代、「私たち」（we, ours）という概念がようやくヨーロッパの社会心理学者の推進のもとで、集団プロセス（group process）の視点から実証研究者の視野に入り［Tajfel 1978］、社会心理学の「社会」を取り戻し、迅速に社会心理学の知識蓄積で一席を占めた［方文 2002］。大量の経験的・理論的研究が、「私」と「私たち」の間にある同質性を見つけることで、集団のメンバーシップ（membership）を獲得するという筋道は、個人と社会の心理的繋がりの確定によりもたらした個人の社会的属性と諸社会心理的機能と効果および、「私たち」

と「彼たち」の心理差異によりもたらした集団間関係の心理過程と社会心理的機能と効果を明らかにしてきた[Hogg 1998]。しかし、社会的アイデンティティ理論(social identity theory)によると、組織／カテゴリー／集団中の個人は、自己のカテゴリー化によって「脱自己化」して、「成員」になり、「この一人」の周りと異なる個体から、「一人」の周りと同じ個体になる。この意味では、このような one of us は、〝自己人〟の「自己」の意味とは異なり、「私たち」の概念の意味と完全には合致できない。

無論、中国社会では、〝自己人〟は「暗黙知」(tacit)あるいは「常識／常人／素朴理論」(lay theory)[No et al. 2008]であるからこそ、西洋理論の「私」と「私たち」の概念によって遮蔽されたのかもしれない。これは、〝自己人〟の研究は本土心理学の方向を採用し、「私」、「私たち」との関連と区別の視点から、〝自己人〟の概念を解析すべきことを意味している。

二　〝自己人〟概念の意味

上述したように、〝自己人〟は西洋社会心理学の「自己」、「集団」(私たち)の概念で解釈することは困難であり、それは「自己」と「集団」の定義が、〝自己人〟の概念には合致しないからであると考えられる。そのため、〝自己人〟と「自己」、「私たち」の概念との区別と関連および、社会心理学の視点からこれらの区別と関連をどう解釈すべきかを検討する必要がある。

㈠　〝自己人〟＝「自己」？

社会心理学者の「自己」に関する研究では、自己観概念の観点から文化差を理解することは良いアプローチである。自己観(self-construal)とは、個人がどのように他者との関係を通して自己を認識するのかということを指す[Cross, Morris, and Gore 2002]。文化観は、自己に関する他の側面ではなく、自己境界の構造的特徴を強調しているため、内容的には、「自己概念」よりも「私—彼」関係の中にある「自己」をより集中的に理解することができる。Markus と Kitayama は、「相互独立的自己」(independent self-construal, IndSC, 略独立的自己)と「相互協調的自己」(interdependent self-construal, InterSC, 略協調的自己)という典型的な二種類の自己観を提唱している[Markus and Kitayama 1991]。氏らは、西洋人(アメリカ人を代表とする)と東洋人(日本人と中国人を代表とする)は、自己に対する認識が完全に異なっていると考えている。西洋社会の個人は、自己を他者から分離した、自己的特性を持っている自主的な実体と捉える。ここでの自己的特性とは、一般的には個人の能力、態度、価値観、動機づけと人格特性

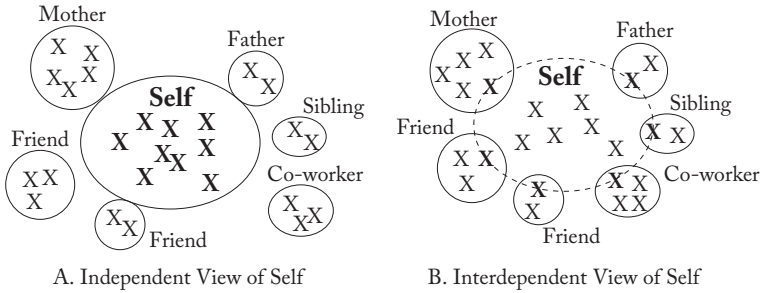

図２　Markus と Kitayama による相互独立的自己と相互協調的自己の概念図

出所：Markus and Kitayama［1991］

を指し、必然的に個人の特徴的な行為に影響を与えている。一方、多くの東洋文化では、個人間の相互依存を保持する仕組みがあるが、このような文化の影響のもとで、個人の自己特性は他者との相互依存に特徴づけられる。「相互協調的自己観」は、個人化された重要な他者との愛着関係（personalized bonds of attachment）であり、「相互独立的自己観」は、特定の符号化された集団や社会カテゴリーとの非個人化の絆である（impersonal bonds）［Sedikides and Brewer 2001］。

Marks と Kitayama の解釈によると図２のＡの太いＸは、「重要な自己表象」（the significant self-representation）を表し、「脱文脈化の自己」（decontextualized self）である。このような自己観は、個人の内的特徴の完全性と唯一性を強調し、それに基づいて他人との区別性と独立性を表出し、個人の自己を実現する、独特な自己ポテンシャルを発揮する、個人の特殊な需要と権利を主張する、個人の独特な能力を発揮するといったことを激励・促進している。

図２のＢの太いＸも同様に重要な自己表象を表しているが、これらの表象は自分とある特殊な他人との関係の中にある。このような表象は、個人が他者との繋がりと依存を強調しているため、個人がある特定の社会関係に置かれるからこそ意義がある。「協調的自己」における自己に対する認識は唯一性ではなく、他者との関係に関連する特性に基づくものである。

この二種類の自己観は同一文化の中で出現することはあるが、多くの研究は、この二種類の自己観が異なる文化の中にあり、集団主義―個人主義志向［Triandis 1988; Triandis et al. 1988; Fischer et al. 2009］、唯一を求める動機づけ、自己高揚（self enhancement）［Heine et al. 1999］、包括的思考―分析的思考［Nisbett et al. 2001］に関連していることを見出した。

Markus と Kitayama が提唱している自己観理論から見れば、〝自己人〟は典型的な「協調的自己」である。自己境界には他の人が進入しているからである。〝自己人〟を「協調的自己」と見なすことは、〝自己人〟は「自己」と同等かどうかという難題を解決できる。すなわち、〝自己人〟はある独特な文化的自己である。他者と愛着的絆を築いたため、自己境界内には重要な他者が取り込まれることで、相互依存的関係が形成される。

(二) 〝自己人〟＝「協調的自己」？

自己観理論は、「独立的自己」と「協調的自己」という二種類の文化的自己観を提唱しているが、さらに問うべきなのは、〝自己人〟と「協調的自己」は同等なのだろうか。「協調的自己」の概念から見れば、自分を文化に置いて定義し重要な他者が自己の境界に入り得ることが見出されたが、その具体的文化背景が欠けている。したがって、どのような人が、なぜそのような人からの自己境界への進入を許すのかを説明できず、その思考パターンとは何か、その社会心理のプロセスが社会的構造とはどのような関係があるのかは答えられない。このように、Markus と Kitayama が提唱している「協調的自己観」は〝自己人〟の特性を十分に説明できないことは明らかである。

東西の二種類の文化では、前述した二種類の自己観は、対人コミュニケーションにおいて異なるスタイルを形成する。「協調的自己」は自分と他者の親密、信頼と、双方が必要とする資源と感情的愛着の交換を行うことを強調しており、それぞれ「道具」と「表出」の特性を持っている[Foa and Foa 1976]。一方の中国文化の特色を帯びた「協調的自己」は、どのような人が相互依存できるのかを判断しなければならない、すなわち、何が私と関連があり、依存できるかを判断することである。ここで重要な中国社会文化の概念――〝関係〟(*guanxi*) を導入する必要がある。

〝関係〟は、対人関係の法則を規定するものである。それは中国の伝統的な親族の服喪制度である「九族五服制度」に由来する。この制度は、葬式に参加する人、喪服の様式、服喪時間を定める。すなわち、一人の〝己身〟(自分自身) から、上には四行 (各行は連続した世代を表す) (父、祖父、曾祖父、高祖父)、下には四行 (子、孫、曾孫、玄孫)、左右に平行な各四列は、右は同世代の男性、左は同世代の女性である。計三二種類の関係は、いわゆる「五服」の親族範囲とそれに応じた喪服様式と異なる服喪期間を構成する。この三二種類の関係は明確な表現があるため、中国語の親族呼称は英語よりも明確で、さらに複雑である (図3参照)。

中国の伝統社会において、〝関係〟は人間関係、自分と集団、集団間の関係を規定する普遍的な法則である。個人

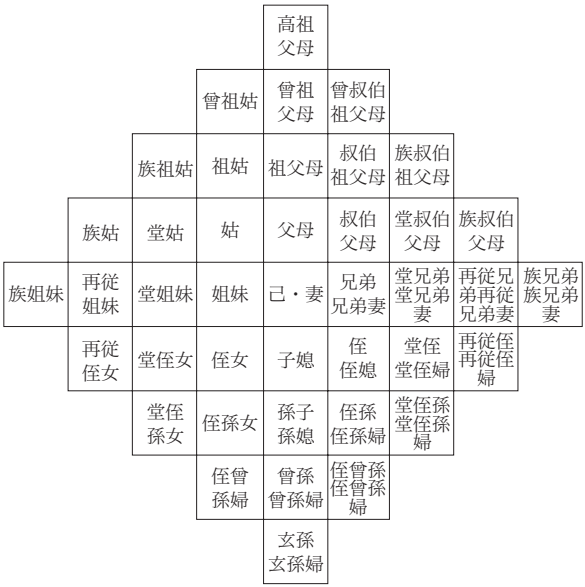

図３　九族五服図

は親族関係制度をもとに、〝尊尊親親〟（尊敬すべき人を尊敬し、親しむべき人と親しむ）を原則とした付き合いを通じて、「ウチ」と「ソト」を区別する〝圏子〟（友人・知人のネットワーク）あるいは「ウチの人」を形成する。このような自己を〝関係我〟（*guanxi self*）と呼ぶ。〝関係我〟は、単に重要な他者との相互依存ではなく、親族関係をもとに、〝差序格局〟を特徴とした社会構造［費孝通 1985］によって、対人間、自分と集団の間、集団間の相互依存の法則性を形成する。関係双方が、既定の対人的義務を持ち、〝応有義務〟（果たすべき義務）、〝応有之情〟（果たすべき情）に準じて、互恵、思いやり等の交換と感情表現を行う必要がある。資源交換において、市場契約で公正取引を行うのではなく、関係に応じた尊卑親疎で分配と交換を行う必要がある。また、即時的ではなく長期的であり、価値が不平等的で、さらに意図的に引き延ばす、愛と憎しみを伴う交換もあるが、〝報〟の原則に従うべきである［金耀基 2013; 孫隆基 2011; 楊宜音 1993, 2001］。そのため、とりあえず、〝関係我〟を「協調的自己」の中国サブカルチャーの一つのタイプと見なす。

㈢　〝自己人〟は内集団なのだろうか？

もし〝自己人〟に自分以外の人を受け入れたのであれば、一つの「二人以上」の集団のように見える。果たしてそれは集団なのだろうか。社会的アイデンティティ理論に基づき、「独立的自己」の個人と群れはどのように集合されるのか、すなわち、集団がどのように構成されるのかを確かめることができる。

社会心理学は一般的に組織の視点から集団を議論し、主に小さい集団（small group）、リーダーシップの行動、集

団的構造および、集団が個人に与える影響に注目している。「自己」の視点から見れば、「独立的自己」は、アイデンティティが個人化された過程を経て、集団成員として集合され、それによって集団が形成される。「自己カテゴリー化」（self-categorization）は社会的アイデンティティ形成の過程において非常に核心的な一環である。それは、各集団にいる個人は集団の他の人と区別できる、一つのカテゴリーの独立成分であることを示している。それぞれの独立成分は他の独立成分と同様に、そのカテゴリーに対してほぼ同じ平等な権利を持っている。「独立的自己」は真空中に存在するのではなく、他人との関係の中で表しているメンバーの性質（membership）である。社会的アイデンティティ理論はこの特徴を明らかにしたため、「自己カテゴリー化」も社会的アイデンティティ理論の確立において重要な内容である。この理論は、一人の個体が、自己と一つのカテゴリーとの心理的関連を確立した後、そのカテゴリーに対するアイデンティティ（identification）が形成され、そのカテゴリー以外の人または他のカテゴリーに対して積極的な特異性（distinctiveness）が形成され、「私たち」という概念が形成されると指摘している。個人が承認するカテゴリーは「内集団」（in-group）と呼ばれ、それに対応する他のカテゴリーは「外集団」（out-group）と呼ばれる。個人がカテゴリーに結びつく心理的プロセスを「自己分類プロセス」または「自己カテゴリー化」［Turner et al. 1987］と呼ばれ、「カテゴリー自己」が形成される。それは「独立的自己」が自己と集団の関係を構築する一種の自己観タイプであり、実際にはすべての文化に存在するが、ヨーロッパ系アメリカ人が最も典型的である。したがって、「カテゴリー自己」は文化的自己観の一種である。

中国人の関係性的「協調的自己」を「カテゴリー自己」と対照すれば、〝自己人〟のいくつかの特徴が見えてくる。まず、自己境界に含まれる人は、上下・尊卑・遠近・親疎の構造の中に置かれる。したがって、個体間には必ず親疎の差があり、互いに異なる。次に、自己境界にどのような人が含まれるのかは、個人の自己選択によるのである。少ない場合は自分一人、多い場合は家族、近所の人、友人、同族人、同郷人、同僚等を含んでおり、さらに多い場合は同国人や全人類を含んでいる。自分一人の場合は「独立的自己」に見えるが、他人を受容する場合は「カテゴリー自己」に見える。ただし、それはカテゴリー化された結果ではなく、自分が異なる状況において他人を受容・依存する結果である。家族、親戚や知人に限られるのが一般的であるが、それ以上受容する場合、頼っているのは同質に対する判断ではない。個人は自分の行いを正しくし、家庭を整えることから、次に国を治めて、天下を統一することまで、〝小我〟から〝大我〟までの昇華を完成させる

可能性があるが［Yang et al. 2010］、社会文化の状況が変化する場合、または個人の道徳修養が足りない場合、個人の〝自己人〟の範囲は小さくなり、他人と協力して仕事できず、内部衝突も現れる。さらに、境界内部に含まれる人は、個人と共通の感情、認識と利益を共有することを必要条件とされるのではなく、受動的に「含まれる」のである。そのため、〝自己人〟は共通認識に基づくのではなく、その主要な機能は共通の一体感を形成するのでもなく、責任、信頼と親密な感情上で〝外人〟（他人）との区別を形成することであり［楊宜音 2001］、西洋の集団構造における「集団」の概念と同等ではない。最近の研究により、中国人実験参加者は内集団のメンバーに対して、アメリカ人実験参加者と比べて、より高い競争警戒（vigilance）、低い協力意識、少ない道徳的な行動を持っていることがわかった［Liu et al. 2019］。これは、内集団と〝自己人〟が相互置換できる概念ではないことを示している。

㈣ 〝外人〟は「彼たち」なのだろうか？

〝自己人〟の対概念は〝外人〟であり、境界外の人、あるいは〝自己人〟に含まれていない人を指している。社会的アイデンティティ理論から見れば、〝外人〟は「外集団」のことである。前述したように、〝自己人〟は「独立的自己」の集合である「私たち」とは同じでないことから、〝外人〟は集団構造にある「彼たち」ではないことを比較的理解しやすい。〝外人〟は「彼たち」と同一ではなく、〝自己人〟と対応しているのは〝非自己人〟〝非関係我〟である。そのため、〝自己人〟と〝外人〟の関係を、単に「私たち」ともう一つの集団の関係と見なすのではなく、〝自己人〟と〝非自己人〟、あるいは「私たち」と「非私たち」の関係と見なすべきである。〝自己人〟と「私たち」との差は、〝外人〟と「彼たち」との差でもある。〝自己人〟によって境界外に排除された人は、〝自己人〟の中心人物とは一定の〝関係〟を形成できず、〝自己人〟の〝差序格局〟外からある程度離れている位置に置かれている。彼女／彼は、〝自己人〟との同質性を見つけ、自分のメンバーとしての特徴を変えることはできず、〝自己人〟の中心人物が自分をネットワーク内に引き込むことで、〝外人〟の身分を変えるしかできない。

〝自己人〟は受容されているため、〝自己人〟の境界は、弾力性と伸縮性を持っている。〝自己人〟と〝外人〟も相対的なものである。家族に対して、非家族は〝外人〟となり、家族親戚に対して、非家族親戚は〝外人〟となり、家族親戚知人に対して、非家族親戚知人は〝外人〟となる。このような〝外人〟は一見「彼たち」と違いはないが、集団メンバーの同質によって分類されるのではなく、〝差序格局〟において確認されるものである。

㈤ 〝自己人〟＝〝自家人〟（身内）？

〝自己人〟概念を日常的に使用するときに、よく〝自家人〟（身内）あるいは〝一家人〟（家族）と表現される。すなわち、〝自己人〟と〝自家人〟は非常に近い概念である。〝自己人〟と〝自家人〟の共通点は、二つの概念とも〝外人〟と対応しているところにある。言い換えると、〝自己人〟、〝自家人〟と〝外人〟、〝別人〟（他人）は互いに対応する対概念であり、互いの存在を暗黙的に含んでいるため、〝自己人〟または〝自家人〟という概念はそれぞれ、互いに区別・対立している人々を表している。一方は「当方」であり、もう一方は「当方」以外の「外方」または「他方」である。この区分の機能から見ると、〝自己人〟または〝自家人〟の概念は「ウチ」と「ソト」を区別する境界線を表している。

社会心理学者は、情報を加工する際に形成されるステレオタイプが、迅速な判断形成に認知的近道（cognitive shortcut）を提供することを見出した。同時に、この認知的近道は文化によって形作られ、文化的特性［尼斯貝特 2017］を持っていることも見出した。〝自己人〟あるいは〝自家人〟は、中国人が自分の文化で開発した認知的工具箱として、自己カテゴリーと社会カテゴリーとの関連において、他者を属性またはカテゴリーに分類する際に、自集団の特徴を持っていない場合、他に存在する自集団ではないカテゴリーではなく、「非自己」に分類することで特徴付けられる。この分類は、「ウチ」と「ソト」の区別、相互対立の境界を強調することである。社会分類を行うときに、相手と自分の集団が同質性、共通の目標と信念を持っているかどうかではなく、自分との関係をより重視している。

〝自己人〟と〝自家人〟の区別は、狭義の〝自家人〟は一般的に、親族関係の範囲内の家庭メンバーを指すことにある。儒教文化において、親族は、「自分」からの距離によって〝差序格局〟を形成する（図3）。現代家庭の核家族化に伴って、核家族の生活方式はますます受け入れられ、家族の境界が親と子女に限られることになる。一方、「拡大家族」は多くのメンバーを含んでいる。家族は主に結婚と出産によって結び付けられており、（男性兄弟間、男性側近親者、男性側遠親者から）養子にする、よその子供を引き取るといった特別な方式で家族になる。その反対で、離婚、分家、関係を絶つといった方式は、元の家族関係を変えさせることになる。したがって、「家族」として見なされる〝一家人〟は、様々な習慣や家族タイプに応じて確認する必要がある。しかし、〝家人〟の概念がどのように変化しても、血縁と婚姻の締結・中断は比較的明確で、顕在的で、判断しやすい。

〝家人〟の概念と比較して、〝自己人〟の概念はそのような明確性を持っていない。〝自己人〟の境界は、ある状況

において〝自家人〟と重なることがある一方、場合によっては全くそうではない。例えば、兄弟は敵になる恐れもあれば、元親子の関係が疎遠になる恐れもあれば、考え方の異なる夫婦は一生一緒にいることもあれば、赤の他人みたいな親族は一生付き合わない関係になることもある。これらのいわゆる〝一家人〟の内部にある、〝尊尊親親〟という家族倫理の要求と相反する状況は、〝自己人〟概念は余計なものではなく、〝自己人〟は〝自家人〟から来ているが、〝自家人〟と同等ではないことを気付かせた。境界の機能からみれば、〝自家人〟は〝家内人〟と〝家外人〟を区別するが、〝自己人〟は心理的概念であり、個人（個体）が認定する〝我方〟を表し、心理上の「ウチ」と「ソト」を区別している。それでは、〝自己人〟の「自己」のように「自己」ではない、「集団」のように「集団」ではなく、「家」のように「家」ではないような特徴はどこから生まれてきたのだろうか。〝自己人〟の社会文化的心理メカニズムをさらに検討する必要がある。

三　〝自己人〟概念の社会文化的心理メカニズム

㈠　生得性かつ交流性

楊宜音［2001］は、華北農村の一回の結婚式の帳簿が示す家庭の社交的範囲に基づいて対象者の関係を分類した研究をもとに、〝自己人〟と〝外人〟の境界を確認するには二次元、すなわち「生得性」〔経験によるものではなく、生まれた時点で既に決まっているのである。例えば、生まれた時点で、両親が誰であるかは決まっている。両親は生得性の高い関係となる＝訳者注〕（ascription）かつ「交流性」（interaction）を満たす必要があることを見出した。二者の交差関係（intersection）を表すには、ここでは集合論の符号「∩」を用いる。生得性と交流性とも高いものは、〝自己人〟の判断条件を満たし、境界内に進入できる。生得性と交流性とも低いものは、〝自己人〟の判断基準を満たせず、〝自己人〟の境界外に排除され、〝自己人〟と対立する〝外人〟となる。生得性が高いが交流性が低いものは、「空巣〝自己人〟」となり、家族の名ばかりあって実際の家族とは言えない人であり、心理上では排除された家族や親友である。生得性が低いが交流性が高いものは、「巣無き〝自己人〟」となり、一刻も早く何かの身分を得て関係を結ぶ必要があり、擬似親族の名を借りて関係を結ぶ人を含んでいる（例えば、〝鉄哥們〟（仲間）、〝結拝兄弟〟（義理の兄弟）、〝金蘭姐妹〟（義理の姉妹）等）。このように、〝外人〟は積極的な付き合いを増やすことで親密度を高め、信頼を得て、境界、さらに〝自己人〟のネットワークの中に入ることができ、〝同党〟〝圏内人〟になる。〝自

己人〃は付き合いの減少、あるいは消極的な付き合いによって疎遠になり、完全にまたは少しずつ境界外まで押し出され、情が完全にないまたは少しずつ薄くなっていき、最終的に赤の他人、完全な〃外人〃になる。〃自己人〃の二次元で確認される境界は、ダイナミックな特徴、自律的な自由と弾力のある空間を備え、社会的コミュニケーションにおいても〃我〃と〃我們〃の間に特有なリンクを形成し、豊かで強い文化的特色を帯びるようになる（図4）。

		“先賦性”（生得性）	
		低	高
〃交往性〃（交流性）	高	“至交”“密友”“娘家人”（親友、嫁の実家の親戚）“缺巣自己人”（「巣無き自己人」）	“自己人”“鉄哥們”“死党”（自己人、仲間、親友）
	低	“生人”“外人”（赤の他人、他人）	“遠親”“婆媳”（遠い親戚、姑）“空巣自己人”（「空き巣自己人」）

図4　“自己人”の境界を定義する二次元モデル

注：左下から右上の矢印は、“外人”から“自己人”に変化する過程を、右上から左下の矢印は、“自己人”から“外人”に変化する過程を指す。

〃自己人〃の二次元モデルは、中国人が、儒教倫理の体系にある親族制度のもとで発展させた、〃自己人／外人〃を分類する図式規則を解釈できる。このような分類規則の出現の実質は、中国の社会的付き合いの関係化の特徴にある。

(二)　関係化vs.カテゴリー化

〃差序格局〃と〃団体格局〃は、中国社会学者の費孝通により提出された、東西の社会的性質を認識する対概念である。氏には以下のような有名な記述がある。

> 我々の社会構造は、一束一束ときれいに括られた柴のようなものではなく、あたかも一つの石を水面上に投げ入れると一輪ずつ広がっていく波紋のようなものだ。各人は一人一人が、自らの社会的影響によって生み出した「圏子」（輪）の中心となる。[1][費孝通 1985: 23]

この概念は、東西社会における関係の特徴の相違点を示している。氏は、文化的特性に満ちた概念――〃関係〃を提出した。この概念は、英語の relation, relationship, correlation と関連している。〃関係〃は中国社会に特有な概念ではなく、中国社会においてはより複雑に、純熟且つ微妙に運用されているに過ぎず、人と人、人と集団、集団と集団の社会的繋がりを築くための主なアプローチとなる。このすべての社会的繋がりの文化的心理過程は、〃関係化〃過

程（guanxilization）と呼ばれる。〝関係化〟と対応しているもう一つの社会的繋がりの文化的心理過程は「カテゴリー化」（categorization）と呼ばれる。後者は、契約で維持されており、平等で、カテゴリー化された成員のアイデンティティにより「資格」［梁漱溟 1980; 費孝通 1985; 金耀基 2013］を獲得するアプローチである。中国伝統の社会規則の強い影響のもとで、正式な組織においても、カテゴリー化されたアイデンティティが往々に圧縮・遮蔽・歪曲・利用・改造・希薄・架空・変形され、さらに、前者に取って代わるか関係化されたアイデンティティに置き換えられる［鄭伯壎 2017］。

カテゴリー化は、「独立的自己」が自己と集団の関係を構築した「自己観」のタイプであり、すべての文化に存在する。例えば、中国では、「男女は区別すべき」「親疎は区別すべき」を強調し、「五倫」の「倫」も差異と区別を意味している［潘光旦 2010; 翟学偉 2011］。これは、非常に明確なカテゴリー意識を反映している。ところで、このような「区分」は、二者間の〝関係〟の規範規則に基づく区分であり［孫隆基 2011: 337］、カテゴリー化された関係に対する加工であり、カテゴリーに対する「カテゴリー化加工」ではない。〝関係化〟のメカニズムは、〝尊尊親親〟（上下尊卑、遠近親疎）をもとにして、「自己主義」の特色を帯び、「上尊下卑」「親疎は差がある」等の権力関係の構造に関する感受と思考パターンを形成しやすい。「カテゴリー化」は、〝物以類聚、人以群分〟（類は友を呼ぶ、人は群れで分かれる）をもとにして、「我が集団中心主義」の特色を帯び、中国文化では、「内集団」と「外集団」に対する社会認知において、「上下」「主従」「尊卑」「大小」「貴賤」「先後」「官民」「強弱」等の二次元対極の型どおりの構造を形成しやすく、さらに、集団間の不平等の生産と再生産を導き、社会構造変換期において深刻な極化現象を促す。〝関係化〟と「カテゴリー化」の二種類のメカニズムの相互作用は、〝圏子〟「同郷」「戦友」「校友」という関係が分類化され、カテゴリーが関係化されたというはめ込み式の自己と集団の関係形式［楊宜音・張曙光 2012］に発展する可能性がある。

㈡ 〝推〟（推す）と〝拉〟（引っ張る）
――境界の支配者は相対的・自主的社会ネットワークの支配者

〝自己人〟境界の二次元モデルは、〝自己人〟は社会心理的構築のプロセスであるという特性を明らかにし、〝自己人〟は対人コミュニケーションにおける二者の相互作用により形成された心理的境界であり、このプロセスの支配者は個人「自分」あるいは「自己」であることを物語っている。〝自己人〟として受け入れるか、それとも〝外人〟と

して扱うかは、個人自身が決めることで、言い換えると、境界に進入させるかどうかについて、個人が裁決・加減しなければならない。一部の人は自分の「生得性」が高く、相手の〝自己人〟であるはずであると思い込んでいるが、実際には相手に〝自己人〟として受け入れられていない。逆に、一部の人は「生得性」が低いが、密接に付き合っているため、互いに認め合い、親縁制度の規定性を超えている。この過程の秘密性と個人性は、〝自己人〟の「〝推〟と〝拉〟の過程」（判断過程）を完全に自主化にした。したがって、簡単に〝自己人〟を「協調的自己」と見なすのも適切ではないと言える。

自己境界の透過性は、自己境界の伸縮性をもたらす一方、この境界透過性を支配するのは支配的な特性を持っている、自主的に個体を支配する個体（agent）である［焦国成 1991］。儒家が提唱している［修身、斉家、治国、平天下］（自分の行いを正しくし、家を整え、国家、ないし天下を治める）の価値観のもとで、自己の個人境界を超えて、自分がより大きい集団、他人と結び付き、境界内に受け入れられる可能性を有している。しかし、この自己拡張の心理メカニズムは、社会的アイデンティティとは異なっている［Yang et al. 2010; Yang 2009］。

㈢　公と私
――伸縮する境界の道徳的二面性を支配する

〝自己人〟は「私」の意味を持っており、〝圏子〟の文化的表象であるとしばしば批判される。費孝通も『郷土中国』という本の中で中国社会構造の〝差序格局〟を議論した時に以下のように述べた。

私は常に思う：中国伝統社会にいる個人は自分のために家を犠牲にし、家のために党を犠牲にし、党のために国を犠牲にし、国のために天下を犠牲にする。……あなたは彼の「私」（利己心）を責めたらどうなろうか？　彼は承服することができないだろう。なぜなら、彼が一族を犠牲にする時、彼は家の為にそれをするのであり、彼にとっての家は「公」だからである。……［差序格局］（差序的構造配置）における「公」と「私」は相対的なもので、どの範囲の「圏子」（集団）の中であろうと、内側を見ればそれは「公」となるのである。[2]［費孝通 1985: 27–28］

内向けの「公」を避けるために、儒家は教化を通して人々を方向転換に導こうとし、「天下」を「公」とし、「君子」を徳行の模範とし、天道と整合させようとしている。君子が「道」の方向性に導かれて、〝正心誠意〟（意を誠にして、心を正す）、〝修身以道〟（身を修るには道を以て

す）、〝修道以仁〟（道を修るには仁を以てす）を実行することで、人の心が自由・調和になっていくだけでなく、個人の修養から他人を管理し、天下と国家を管理するまで、最終的に修得される〝大我〟は、〝動而世為天下道、行而世為天下法、言而世為天下則。遠之則有望、近之則不厭〟（故に在位の君子、動いて世々天下の道となり、その行いは世々天下の法となり、その言は世々天下の則となる。もしこれに遠ければ、民これを望みて思慕すること深く、これに近ければ、民これを厭わずして愛着止むことがない[3]）の境地に達する（『中庸』第二十九章）。

ところで、伝統の礼儀社会では、人々は自分の内心の道徳的自律のみによっては、一家一族、一郷一里の枠を出て、天下を案じる〝大我〟まで達するのは容易なことではない。〝自己人〟をもとに関係化された社会分類を行った後、公私相通の結果は、社会では公私混同、公共の利益を損ない私腹を肥やすような現象が横行するだけではなく、道徳の教化と輿論監視の目をくぐるため、公にかこつけて私腹を肥やす、表裏不一致の虚偽の「公」のような現象が現れる。一方で、自分を超えて〝大我〟に昇華する可能性［趙汀陽 2011］も含まれており、これが〝自己人〟の道徳的立場である。

華人の自己観は、対人関係上で相互に依存しているだけでなく、小から大へのネットワークの道徳的方向性を持っている。そのため、自己と集団との関係は、〝我―我們〟と通じている、受け入れられる、境界が伸縮している〝大小我〟であり、特に新儒家から見れば、このような自己は身を修める等の道徳的工夫の働きのもとで、「我―人生」の意義を持ち［楊国枢・陸洛 2009; 楊宜音 2014］、精神発展の動態的過程を反映している［陸洛 2009］。

上述したように、親族の〝差序格局〟と自主的な自己支配に加えて倫理社会の道徳の二面性から、透過性のある伸縮する心理境界が構成されたのである。これが〝自己人〟概念の社会文化的心理の意義に含まれる三つの大きな特徴である。〝自己人〟は「群」のようで「群」ではなく、「家」のようで「家」ではない。「ウチ」と「ソト」を区別する方法は、自己カテゴリー化でも社会的カテゴリー化でもない。その境界の透過性、自己支配の特徴により、〝自己人〟は完全な協調的自己でもなく、完全な独立的自己でもないが、独立的な協調的自己（independent interdependent self-construal）とも、協調的な独立的自己（interdependent independent self-construal）とも名付けてよい。すなわち、協調的自己と独立的自己という二つの概念を打ち抜き、西洋社会では互いに対立している個人と社会を、関係の性質で「我―我們」を貫通する。言い換えると、独立的自己と協調的自己の二分法は、中国社会文化の〝自己人〟現象を

解釈するには不十分であり、社会文化の心理的性質をうまく反映できない。

〝関係〟は中国社会の中で最も特色のある社会関係として表象され、中国人の社会生活に重要な役割を果たしている。なかでは、関係の〝差序格局〟の特性、すなわち関係の相互作用特性、〝自己人〟と〝大小我〟、自己と集団の関係を扱う際に〝大我〟が優先される道徳指導は、一定の状況においてはいくつかの合理的・積極的な要素を持っている。それはすなわち、(1)家庭等の知人社会では、分配秩序を保証し、分かち合い、行動が予測可能なため、信頼と協力のコストは比較的に低い。(2)〝大我〟に動員されやすく、社会参加を行い、人の身になって推し量ることで、他人を受け入れて、最大限に〝大我〟、「天下」と「調和」、「大同」〔中国の理想郷を表す伝統思想である。世では人々は能力に応じて地位を得て、相互に親睦しあっている＝訳者注〕を実現し、中国人に全体的な思考方式を提供している。

しかし、一方、「関係文化」は明らかに現代生活とは相容れない、消極的な要素ももっているため、〝自己人〟概念をもとに自分と集団の関係を構築・形成するには負の影響を与える。すなわち、(1)小さな関係ネットワークを意識し、ウチとソトを区別すること、義務、親密、信頼は特殊で関係性的であることを強調している。そのため、多くの対人相互作用が関係の営みを行い、各種の資源を関係規則のもとで分配を行う。正式な制度のもとで関係の潜在的規則を実行し、関係化でカテゴリー化の関連メカニズムを押し出すことで、平等を無視し、等級だけを重視する。(2)差序格局のもとで、たとえ集団利益のためであっても、もとは臣民の服従の心理状態から生まれたため、工商社会、契約社会、市民社会の建設にとっては大きな障害となる。

中国の〝自己人〟概念の存在する土壌はまだあるか否か、〝関係〟の文化はまだ生命力があるか否かは、学術界の注目している問題である。中国の改革開放、およびグローバル化、市場化、科学技術、特に新型メディアの発展に伴い、中国の「安土重遷」の郷土社会は資本、情報、人員流動の推進力のもとで必然的に巨大な変化を遂げ、〝関係〟文化と「カテゴリー」文化が融合しバランスの取れた境地に到達するだろう。

参考文献

［美］尼斯貝特，理查德（Richard E. Nisbett）2017『邏輯思維——擁有智慧思考的工具』北京：中信出版集団

［英］威廉斯，雷蒙（Raymond H. Williams）2005『関鍵詞——文化与社会的詞匯』劉建基訳、北京：三聯書店

Chiu, C. and Y. Hong 2006 *The Social Psychology of Culture*. New York, NY: Psychology Press.

Cross, S. E., M. Morris, and J. Gore 2002 "Thinking about

Oneself and Others: The Relational-interdependent Self-construal and Social Cognition," *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 399–418.

Fischer, R., M. C. Ferreira, E. Assmar, P. Redford, C. Harb, S. Glazer, B.-S. Cheng, D.-Y. Jiang, C. C. Wong, N. Kumar, J. Kärtner, and M. Achoui 2009 "Individualism-collectivism as Descriptive Norms: Development of a Subjective Norm Approach to Culture Measurement," *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 40 (2), 187–213.

Foa, E. B. and U. G. Foa 1976 "Resource Theory of Social Exchange." In J. W. Thibaut, T. T. Spence and R. C. Carxon (eds.), *Contemporary Topics in Social Psychology*. Morristown, N.J.: General Learning.

Friske, A. P., S. Kitayama, H. R. Markus, and R. E. Nisbett 1998 "The Cultural Matrix of Social Psychology." In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, and G. Lindzey (eds.), *The Handbook of Social Psychology* (4th ed., pp. 915–980). Boston: Mcgraw-Hill.

Heine, S. J., D. R. Lehman, H. R. Markus, and S. Kitayama 1999 "Is there a Universal Need for Positive Self-regard?" *Psychological Review*, 106, 766–794.

Ho, D. Y. F. 1991 "Relational Orientation and Methodological Relationalism," *Bulletin of the Hong Kong Psychological Society*, 26–27, 81–95.

Ho, D. Y. F. 1995 "Selfhood and Identity in Confucianism, Taoism, Buddhism, and Hinduism: Contrasts with the West," *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 25, 115–139.

Ho, D. Y. F. 1998 "Interpersonal Relationships and Relationship Dominance: An Analysis Based on Methodological Relationalism," *Asian Journal of Social psychology*, 1, 1–6.

Hogg, M. A. 1998 *Social Psychology* (2nd ed.). London: Prentice Hall Europe.

Liu, S. S., M. W. Morris, T. Talhelm, and Q. Yang 2019 "Ingroup Vigilance in Collectivistic Cultures," *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 116 (29) 14538–14546. DOI: 10.1073/pnas.1817588116

Markus, H. R. and S. Kitayama 1991 "Culture and Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation," *Psychological Review*, 98, 224–253.

Markus, H. R. and S. Kitayama 2010 "Cultures and Selves: A Cycle of Mutual Constitution," *Perspectives on Psychological Science*, 5, 420–430.

Nisbett, R. 2004 *The Geography of Thought: How Asians and Westerners Thinks Differently … and Why*. New York: Simon and Schuster.

Nisbett, R. E., K. Peng, I. Choi, and A. Norenzayan 2001 "Culture and Systems of Thought: Holistic vs. Analytic Cognition," *Psychological Review*, 108, 291–310.

No, S., Y. Hong, H. Liao, K. Lee, D. Wood, and M. Chao 2008 "Lay Theory of Race Affects and Moderates Asian Americans' Responses toward American Culture," *Journal of Personality and*

Social Psychology, 95, 991–1004.

Sedikides, C. and M. B. Brewer 2001 “Individual Self, Relational Self, and Collective Self: Partners, Opponents, or Strangers?” In C. Sedikides and M. B. Brewer (eds.), *Individual Self, Relational Self, Collective Self* (pp. 1–4). Philadelphia: Psychology Press.

Tajfel, H. 1978 *Differentiation between Social Groups*. London: Academic Press.

Triandis, H. C. 1988 “Collectivism v. Individualism: A Reconceptualisation of a Basic Concept in Cross-cultural Social Psychology.” In C. Bagley, G. K. Verma (eds.), *Cross-Cultural Studies of Personality, Attitudes and Cognition* (pp. 60–95). London: Palgrave Macmillan.

Triandis, H. C., R. Bontempo, M. J. Villareal, M. Asai, and N. Lucca 1988 “Individualism and Collectivism: Cross-cultural Perspectives on Self-ingroup Relationships,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 323–338.

Turner, J. C., M. A. Hogg, P. J. Oakes, S. D. Reicher, and M. S. Wethere 1987 *Rediscovering the Social Group: A Self-categorication Theory*. Oxford: Basil Blackwell.

Wyer, R. S., C-y. Chiu, and Y-y. Hong (eds.) 2010 *Understanding Culture: Theory, Research, and Application*. New York: Psychology Press.

Yang Yiyin 2009 “Guanxilization or Categorization: Psychological Mechanisms Contribute to Formation of Chinese Concept of ‘us’,” *Social Sciences in China*, 30 (2), 49–67.

Yang, Y., M. Chen, W. Chen, X. Ying, B. Wang, J. Wang, and A. Kolstad 2010 “The Effects of Boundary-permeated Self and Patriotism on Social Participation in Beijing Olympic Games,” *Asian Journal of Social Psychology*, 13, 109–117.

陳原 1980『語言与社会文化』北京：三聯書店

方文 2002「欧洲社会心理学的成長歴程」『心理学報』三四巻六号、六五一一六五五頁

費孝通 1985『鄕土中国』北京：三聯書店

焦国成 1991『中国古代人我関係論』北京：中国人民大学出版社

金耀基 2013『中国現代化的終極願景——金耀基自選集』上海：世紀出版集団・上海人民出版社

李少崐 1991『美国的心理学界』台北：商務印書館、一七一頁

梁漱溟 1980『東西文化及其哲学』北京：商務印書館

陸洛 2009「從自我心理学的研究中找回自我」楊国枢・陸洛著『中国人的自我——心理学的分析』重慶大学出版社、一一七頁

潘光旦 2010『儒家的社会思想』北京：北京大学出版社

孫隆基 2011『中国文化的深層結構』桂林：広西師範大学出版社

楊国枢 1993「我們為什麼要建立中国人的本土心理学」『本土心理学研究』（台北）、第一期、六一八八頁

楊国枢・陸洛 2009「序」楊国枢・陸洛著『中国人的自

我：心理学的分析』重慶大学出版社、一－三頁
楊宜音　1993「報：中国人的社会交換観」李慶善主編『中国人社会心理論集 1992』香港：時代文化出版公司、一五八－一七〇頁
楊宜音　1995「試析人際関係及其分類――兼与黄光国先生商榷」『社会学研究』（北京）第五期、一八－二三頁
楊宜音　2001「自己人――一項有関中国人関係分類的个案研究」『本土心理学研究』（台北）、総第一三期、二七七－三一六頁
楊宜音　2002「自己人――従中国人情感格局看婆媳関係」『本土心理学研究』（台北）、総第一六期、三－四一頁
楊宜音　2014「日常生活的道徳意義和生命意義――兼談中庸実践思惟概念的構念化」韋慶旺・楊中芳主編『中国社会心理学評論』第八輯（中庸心理研究-Ⅱ）、北京：社会科学文献出版社、二五六－二七四頁
楊宜音　2015「多元混融的新型自我――全球化時代的自我構念」趙志裕・呉瑩主編『中国社会心理学評論』第九輯（文化混搭心理研究-Ⅰ）、北京：社会科学文献出版社、九七－一一七頁
楊宜音・張曙光　2012「在生人社会中建立〝熟人〟関係――対大学〝同郷会〟的社会心理学分析」『社会』第六期、一五八－一八一頁
楊中芳　1991「回顧港台〝自我〟研究――反省与展望」楊中芳・高尚仁主編『中国人、中国心――社会与人格篇』台北：遠流出版公司、一五－九二頁
楊中芳　1991「試論中国人的〝自己〟――理論与研究方向」楊中芳・高尚仁主編『中国人、中国心――社会与人格篇』台北：遠流出版公司、九三－一四五頁
楊中芳　1996『如何研究中国人』台北：桂冠図書出版公司
楊中芳　2001『如何理解中国人――文化与个人論文集』台北：遠流出版公司
翟学偉　2011『中国人的関係原理――時空秩序、生活欲念及其流変』北京：北京大学出版社
趙汀阳　2011『天下体系』北京：中国人民大学出版社
鄭伯壎　2017『華人領導的十堂必修課』台北：五南出版公司
朱利安　2018『従存有到生活――欧洲思想与中国思想的間距』東方出版中心
朱瑞玲　1993「台湾心理学研究之本土化的回顧与展望」『本土心理学研究』（台北）、第一期、八九－一一九頁
朱瀅・伍錫洪　2017『尋找中国人的自我』北京：北京師範大学出版社

訳注

（1）　西澤治彦訳『郷土中国』風響社、二〇一九年、六八頁による。
（2）　同前、七四頁を参考にした。
（3）　宇野哲人訳『中庸』講談社、二〇一一年、一七七頁の通解を参照した。